

第37回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校3年生の部 最優秀賞

さいはての島へ

川湯中学校 池上 温人君



僕は、死ぬことが怖い。死んだらどうなるかわからない、それに確実にそれまでの生活が失われることになる。

誰だって、いつの時代だってその恐怖を拭いきれない。自分や家族、周りの人の人生が終わることを拒もうとし、そうなら激しく心動かす。

そんな死に關して一つの考え方を与えてくれたのが今回読んだ本。本の中では「永遠の生命」や「死」ということが話の中心となる。その中で主人公の言葉に「生きていくには必ず死ぬ。いつか死ぬとわかっていることが幸せなこと」という意味のものがあつた。僕はこの言葉に深い感銘を受けた。

このような考え方をした事はなかつたが考えてみたりそうかもわからない。どんな人だって、どんな生き物だって

生きていくからにはいつかは必ず死ぬことになる。「一生の内には」今しかないから「終わりを知っているからこそ頑張れる。人生を良い物にしよう」と楽しもうと努力する。だからこそ幸せになれる。でも終わりがいつかなくてわからない。明日かもしれないし、五十年後かもしれない。

どこで、このようになんていくら考えてもわからない。

今年の三月に起こった大地震では一万人を超える人々、それから沢山の動物達の命が奪われた。こうして半年以上たった今でも僕達の心には強く大きく残っている。

誰がこんなことを予期していただろうか。小さい子供からお年寄りまで個人の気持ちを露知らず無情にも大自然は命を奪った。

夢や目標を持っていた人がどれだけいたことだろうか。僕は本を読んで感じたことを、震災と重ねこのような事を思った。

いつ自分の身に何が起こるかかわからない。だからこそ僕は一瞬を大切に生きていきたいと思った。

今、僕には大きな夢がある。それを叶えることが人生の充実につながると思っている。だからこそ夢を叶える努力をすべきだと思つた。

でも、先程の通りその前に死ぬ可能性だつて否めない。もしそうならば人生は努力だけして何も得なかつた、達成できなかったものになってしまう。

かといって目先の楽しさだけに囚われていくと夢を達成することはあつたが、真つ当な生活さえ保障できない。

難しいものである。考え続けてわかるものでないだろう。ある程度自分で割りきらなければならぬ。正解があるわけでもない。でも自分は後悔したくない、それに楽しくありたい。

やはり今判断しきれぬものでもない。でもこう考えることができたから、これから頭の片隅に置いておける。自分で自分を導くことができる。

いつかどうしても譲れないものが現れたとき、それを目指そう。後悔はない。新しく僕に考え方を与えてくれたこの本。一冊でこんなに思いを巡らせることができる。この本に出会えてとても良かった。

書名「さいはての島へ ゲド戦記3」
アーシュラ・K・L・グウィン 著

(寸評)読書を通じて、人間だれしもいつ訪れるかわからない「死」についての考えを力強い文体で書きつづっています。昨年の東日本大震災、そしてこの本との出会いによって広がった考えを大切にこれからも精いっぱい生きていきたいと思います。

これからも読書に親しみ、自分の考えを深めていってください。



■高等学校の部 最優秀賞

わからない

弟子屈高等学校2年

大浦 彩織さん



「迷惑をかけるかどうかなんて、やってみなきゃわからないよ。」私はこの言葉に心を打

たれました。この言葉は、千穂という主人公が新しく仕事場に入ってきた耳の聞こえない歩美に伝えた言葉でした。歩美は耳が聞こえなくても問題がないように、学校で職業訓練をたくさん受けてきました。しかし、今の仕事場でも前の仕事場でも、耳が聞こえないことを理由に掃除などの雑用ばかりを仕事として与えられました。歩美は働ける能力があるのに働かせてもらえないことに腹を立てていました。周りが勝手に歩美の能力を決めつけ、そこに限界を置いてしまったからです。そんな歩美の能力と気持ちに気付いた千穂は、一緒に仕事ができるように行動を起こしました。しかし、歩美は「どうせ迷惑をかけるだけだ」と誘いを断わろうとしました。そのときに千穂がああ言葉を伝えたのです。周りが歩美に限界をつけるため、歩美自身もその限界を認めようとしてしまっていました。けれど、千穂がいたおかげで歩美も変わることができました。

このように、相手を外見や第一印象で

能力などを決めつけてしまうことはよくあると思います。私も同じような経験をしました。それは私が中学三年生だったときです。文化祭の準備で私は演劇をやっていました。去年も演劇をやっていたこともあり、計画や準備の流れはほとんど把握していました。そんなこともあって私は、大道具や音響、役者など様々な役割に手をつけていました。一年生がするべきである仕事も「どうせ教えたってできない」「自分でやったほうが早い」と思い込み、時間があるかぎり仕事をみつけ淡々とこなしていきました。ところがある日、私が用事があり、準備に参加できなかったときがありました。その次の日、昨日はどつだったか聞いてみました。すると、「大浦がやっていた仕事を頼んでも誰もできない。だから、進まなかつた。」と返ってきました。私はそこで先輩にも仕事を与えて説明しながら、ゆっくりと作業をすることにしてみました。やはり最初は初めてのことがばかりだったので、進むのも遅く少し後悔しました。しかし、時間が経つと早さは上がり、私と同じくらいか早いと思うまでの仕事をしてくれる先輩がいました。そのおかげで全体の早さも上がり、余裕を持って完成させることができました。このとき、私は最初から先輩に仕事をさせなかつたことをとても後悔しました。そして、先輩には申し訳ない気持ちでいっぱいでした。もし、あのまま私が全ての仕事をやってしまったら、来年の準備の進め方がわからない人はかりになつてい

たと思います。私の行動が次の文化祭の演劇の質を落とす原因になりそうでした。やってみなきゃわからないよ。」とは本当にその通りだと思いました。それから何か仕事を与えられた場面があると、私は周りの人と協力して行うようになりました。最初の作業が上手いかなんかでも、最終的に効率がとても上がることに気がきました。また、苦手な作業を与えてしまい、困っていたら別の仕事を与えたり、やり方を教えてあげたりしました。そうすることで相手も経験することができることも、私も教えることでより勉強になりました。今も時々、相手を勝手に決めつけることが多くあります。しかし、相手の才能は潰さないようにしたいです。

また、私が第一印象だけで才能を決めつけられる場合もあります。それは、面接です。どんなに頭がよく、行動力がある人でも、身だしなみがだらしないことだけで、志望する会社には入ることができません。また、どんなに資格をたくさん持っていても、言葉遣いが汚ない人は志望する学校には入ることができません。しかし、成績が良くなっても、明るいあいさつができて、しっかりと自分を表現できれば、志望する会社や学校に入ることができるかもしれません。先ほど、第一印象は気にせず、まず仕事を与えてみると言いましたが、世の中の人はその簡単ではありません。しかし、相手に第一印象をどう見させるかは自分次第です。だからこそ、自分の才能を相手に認めさ

せることができるように、自分から相手を引きつけられるようになりたいです。また、やったことがないこともあきらめずに取り組み、隠れている才能も見つけていきたいと思います。

書名「九十九のなみだ・星」

「ありがとう」
谷口 雅美 著

(寸評)読書を通してもの見方が広がるというの、とても効果的な本の読み方だと思います。大浦さんも、内容から自分自身の今までの振り返り、次に生かしていくこととします。第一印象で人を判断することの大切さと危うさを、自分自身の経験と重ねあわせて表現していました。本を読んで得た新たな気持ち大切に日々の生活を送ってほしいと思います。

※生徒の学年は、コンクールが行われた平成23年度当時のものです。